

雪女と散歩



きのうのよる、ぼくのまちでゆきがふりました。

さむいドイツにすむひとにとっては、とくべつなことではないかもしれませんが、ぼくはあたたかいにほんのみなみにすんでいます。

ここではゆきはほとんどふりません。なので、そのしろいはなびらをこううんにもみることができたのは、きのうがはじめてでした。

「のびたくん！」あさ、おかあさんがぼくをおこそうとよびました。

「のびたくん、ゆきがふっているわよ！おきてきがえて、はやくおばちゃんのところへ行ってあげて。おばちゃん、さむくなるのになにもよういしてなかったから、ぶあつしようふくがいるの。このコートと、ぼうしと、それからぶくろももって行ってあげて。」

「えっ？」ぼくはねぼけまなこでこたえました。

「わざわざおばちゃんのところまで行かなきゃいけないの？でもすごくとおいし、そとはとってもさむいよ...」

「のびたくん、あなたおとこのこでしょ！それにそとはまっしろでとてもきれいわ！きつとたのしいわ！」

そのことばですべてがきまりました。

ぼくはあつでのコートをきて、おもいふゆようのくつをはいてしゅっぱつしました。

まだまだそらかゆきがおちてきていて、めのまえのみちもふだんとちがっていて、みわけがつきませんでした。ちいさいおかをあるいて、すべってころばないようちゅういしなればなりませんでした。

なんてきれいなんだろう！

そしてまちはとてもしずかで、まるでひとびとはみなねむっているかのようでした。

まったくどこにいるかわかんないや。どっちをむいても、しろ、しろ、しろ！もうみちにまよっちゃったのかな？このいえもしらないし、あっちのいえもみたことない...。こうやってゆきにすっかりかこまれちゃうと、なんだかちょっときみがわるいや。

ひとりぼっちでこわくなって、みちにまよったようなきもするし...。そんなとき、まえにいちどきいたこわいはなしをおもいだしました。

はげしいふぶきのなかでひとびとをおどろかせ、みちにまよわせるおばけ、ゆきおんなのはなしを...。あんなの、こどもだましのはなしだけど、でも...

かぜはたえまなくふいていて、まるでつめたいてがのどにふれるかのよう。

あのとおくにみえる、きみのわるいシルエットはなに？ながくておおきい！ただのきにきまつてる！

もちろんそれはただのきでしたが、それでもぼくはおそろしくなって、わっとかけだしました。

しんぞうがドキドキしながら、ぼくはおばちゃんのをさがしました。

あっ！やっと！あのとんがりやねの、おにわにさくらのきがあるおうち！みつけた！よかった、やっとみつけたよ！

おばちゃんがげんかんのドアをあけてくれるやいなや、ぼくはおばちゃんにとびついて、こしにかおをうずめました。

「まみこおばちゃん！こわいよう！ゆきおんなが！」

「あらあら」おばちゃんはおちついたこえでなだめると、ぼくをリビングへとつれていきました。

「ゆきおんなをこわがるひつようなんてないのよ。」

ぼくはおばちゃんにもってきたふくをわたし、いっしょにリビングであたたかいおちゃをのみました。

「でもしってる？」おばちゃんはききました。

「どうしてゆきおんながおばけになってしまったか。」

ぼくはあたまをよこにふりました。

「かのじょはわかいおんなのひとだったの。ふぶきでみちにまよってしまっ
ね、ひとりさびしくなくなったのよ。いまはおばけになってしまったけどね、
ちいさなこどもをきずつけるようなことはぜったいにしないわ、のびた。」

きょうみぶかくおばちゃんのはなしをきいていたぼくは、そのことについてよくかんがえてみました。

ほんとうにこわがるひつようはなかったのかな？

たしかにおばちゃんのはなしはすじがとおっている。ゆきおんなはわかいおん
なのひとだったんだ。ぼくとそんなにとしもかわらなかったかもしれない。

なんてひどいうんめいなんだろう。いまもおばけとしてさまよっているのもふ
しぎじゃない。

「おちゃ、ありがとう！」ぼくはそういうと、くつにあしをすべりこませまし
た。

「かえりみちはもうこわくないさ！」

おもてへでると、まだまだゆきはふっていて、まるでまほうのようにひかって
いました。

ゆきおんなのかみも、おなじくらいしろいのかな？

ゆきおんなのこえも、きぎのあいだをはしりぬけるかぜのようなこえなのか
な？

ゆきおんなのほっぺたも、いけにふりつもったゆきのようにつめたいのかな？

かえりみちは、ゆきおんなにばったりあうかもしれないということはまったく
しんぱいしませんでした。みちにまよって、いえがわからなくなるしんぱいも
もうありませんでした。

はればれとしたきもちで、かどをまがるたびに、ひそかにきえかかりそうなそ
のすがたをみつけ、かわいそうなおんなのひとといっしょにいえまでかえれな
いかな、なんておもっていました。